

後半へのスタート

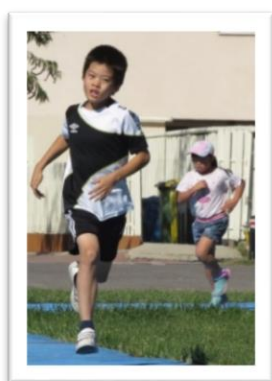
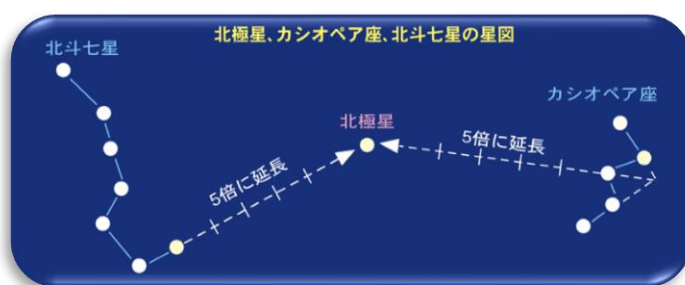
校長 清水 哲也

秋になって夕暮れが早くなり、夜空の星をじっくりと眺めることができるようになりました。日本と同じ形に見える北斗七星に懐かしさを感じ、柄杓の先端を5倍して北極星（Polaris）を確認したとき、その高度の違いからここがルーマニアであることを実感しました。

古くから北極星は、夜空における唯一の固定点として航海の支えとなってきました。肉眼で見える数えきれない星の中で、一つだけ地軸の延長線上にあって動かない星があるという偶然に改めて驚きと畏敬の念を覚えます。北極星までの距離は約400光年、今、見ているのは関ヶ原の合戦の頃の姿です。最新ロケットで地球を出発して北極星に向かったら、おおよそ1000万年後には到達できそうです。

天体については、3年生で「太陽と地面の様子」、4年生で「月の形や位置の変化、星の明るさや色」、6年生で「月の形や太陽の位置」、中学3年生で「天体の動き、自転公転、太陽・惑星・恒星、月や金星の運動」という内容を学習します。

将来、どこかの山で遭難したりボートで漂流したり？したときのために、太陽や夜空の星の位置から方角を正確に把握し、目的地に行くためのスキルを身に付けることも大切です。「いや、スマホのGPSで用が足ります！」という声には「電源が切れるかもしれない」と応対し、「そのときのために予備バッテリーを常備しています！」の声にはその心がけを褒めて…。



9月21日と28日に近くの Mark Twain インターナショナルスクールのトラックをお借りして、持久走大会を行いました。国内の中学校や高等学校には部活動がありますが、施設的な問題、警備上の理由などから部活動を設置している日本人学校は少ないのが現状です。自分の体力の限界を意識してそれに挑戦するような場面は多くありません。

当日の大会では、ベストタイムを出すことを目標として歯を食いしばりながらトラックを走っている姿がとても輝いて見えました。心身ともに最も大きく成長する小中高という貴重な時期に、このような限界への挑戦を経験することは本人にとって決して無駄にならないと考え、今後も継続して取り組んでいきます。

2018年度も半分が終わり、いよいよ後期が始まりました。児童生徒数はブカレスト日本人学校の40年の歴史の中でも最少ではないかと思われる4名となってしまいました。解決しなければならない多くの課題も未だありますが、4名の児童生徒、1名の現地スタッフ、5名の派遣教員の計10名が力を合わせ、保護者の皆様や運営委員会の力を借りながら後半戦を乗り切っていく覚悟です。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。